

2023年度 医学部 IR 報告書

—2022年度卒業生の初期研修先アンケート

現状と3年間の傾向—

藤田医科大学 IR 推進センター

医学部 IR 分室

2023年10月31日



藤田医科大学 I R 推進センター 医学部 I R 分室

2023年度 医学部 IR 報告書

—2022 年度 卒業生の初期研修先アンケート 現状と 3 年間の傾向—

目次

概要

1. 背景と目的

2. 対象

3. 方法

4. 結果 (1) 2022 年度卒業生研修先の調査結果
(2) 2020～2022 年度卒業生研修先の調査結果の推移

5. まとめ

2023 年度 藤田医科大学 I R 推進センター 医学部 I R 分室

浦久保秀俊、一瀬千穂、横田正明、飯塚成志、若月徹、古澤彰浩、

島向健太、松原敬太、白井美沙子、山本正樹、藤江里衣子、吉本潤一郎

概 要

「独創的な学究精神を持った謙虚で誠実な医師を育成する。」ことが藤田医科大学医学部の使命であり、卒業時にすべての本学卒業生が身に付ける能力として「卒業コンピテンス（＜医師としてのプロフェッショナリズム＞、＜コミュニケーション能力＞、＜専門職連携＞、＜医学及び関連領域の知識＞、＜独創的探究心＞、＜診療の実践＞、＜地域社会への貢献＞）」と、これに対応する「卒業コンピテンシー」を定めている。

数年にわたり本学が取り組んできたカリキュラム改革の効果を評価するため、本学卒業生の卒業時の能力について第三者の視点があることが望まれる。今回、2022年度の本学医学部卒業生を卒業1年目の研修医として受け入れてくださった病院の直接的指導者に研修1日目の「卒業コンピテンス・コンピテンシー」に関する諸項目の修得度を評価していただいた。また、本評価結果に加えて2020・2021年度卒業生を対象とした直近の過去2年度の評価結果と合わせて、直近3年度にわたる変化を調べた。

2022年度卒業生で2023年度1年目の初期研修先が判明している107人のうち、83人について回答が得られた（回収率77.6%）。＜医師としてのプロフェッショナリズム＞、＜コミュニケーション能力＞、＜専門職連携＞、＜医学および関連領域の知識＞、＜独創的探究心＞、＜診療の実践＞、＜地域社会への貢献＞の7項目のいずれも「最低水準には届いている」と評価された割合は100%であった。また、「概ね、または、完全に習得できている」と評価された割合が特に高かった項目は、＜コミュニケーション能力＞と＜医師としてのプロフェッショナリズム＞であり、それぞれ、91.6%と85.5%であった。一方で、＜地域社会への貢献＞の評価が最も低く、45.8%であった。

直近3年度にわたる分析では、卒業コンピテンス7項目全てにおいて、「概ね、または、完全に習得できている」と評価された割合は大きく増加していた。ただし、今回の調査と過去の調査で評価尺度の変更があったため、必ずしも公平な比較とは言えず、今後数年間に渡ってその推移は注意深く見守る必要がある。

本調査結果から、本学医学部卒業生の卒業コンピテンス・コンピテンシーは少なくとも最低水準には到達できていると研修先病院から評価されていることが確認できた。しかし、他の項目と比べると＜地域社会への貢献＞の評価が低く、教育カリキュラムを通して、いかに地域への関わりを高めるべきかという課題が明らかになった。

1. 背景と目的

本学医学部は2015年度第1～3学年よりアウトカム（学習成果）基盤型教育を取り入れた新カリキュラムに移行している。「独創的な学究精神を持った謙虚で誠実な医師を育成する。」ことが藤田医科大学医学部の使命であり、卒業時にすべての本学卒業生が身に着ける能力として「卒業コンピテンス（＜医師としてのプロフェッショナルリズム＞、＜コミュニケーション能力＞、＜専門職連携＞、＜医学及び関連領域の知識＞、＜独創的探究心＞、＜診療の実践＞、＜地域社会への貢献＞）」と、これに対応する「卒業コンピテンシー」を定めている。

本学が取り組んできたカリキュラム改革の効果を評価するため、本調査では、2022年度の本学医学部卒業生を卒業1年目の研修医として受け入れて頂いた病院の直接的指導者に、研修1日目の「卒業コンピテンス・コンピテンシー」に関する諸項目について、その修得度を評価していただいた。第三者の視点から評価とフィードバックを受け、今後の医学部教育の見直しの資料とする。2022年度卒業生に対する評価内容を分析するとともに、2021年度・2020年度卒業生を対象とした直近の過去2年度の評価結果と合わせて、過去3年度にわたる変化を調べた。

2. 対象

2022年度の本学医学部卒業生であって、2023年度の初期研修先が判明している研修医107人が対象である。なお、2021年度と2020年度の調査対象者はそれぞれ104人と102人であった。

3. 方法

2022年度の本学医学部卒業生を1年目の初期研修医として受け入れていただいた病院の臨床研修センター長宛に協力依頼文書を2023年7月に郵送し、無記名自記式調査を実施した。依頼文書には、本調査の趣旨とアンケートへの回答方法の説明を記し、アンケートの回収はGoogle社のアンケートツール（Googleフォーム）を利用した。アンケートの回収期間は2023年7月から8月であった。

2021・2020年度卒業生を対象とした調査では、Googleフォームではなく、紙媒体の調査票を協力依頼文書に同封した返信封筒で返送いただく方法で回答を得た。調査実施時期は、卒後すぐの7月を中心に、2021年度卒業生を対象とした調査では2022年7月から9月、2020年度卒業生を対象とした調査では2021年7月であった。

臨床研修センター長宛の依頼文および調査票を巻末に示す。アンケートには病院名を記入していただいたが、集計・分析は匿名化して行った。調査票は7つの設問からなり、それぞれ、調査対象の研修医が、研修医1年目の初日の能力・資質として、4段階の評価尺度（1：最低水準には届かない、2：最低水準には届いている、3：最低水準を超え、概ね習得できている、4：最低水準を超え、完全に習得できている。）のどの段階であったかの評価を依頼した。設問は次の通りである。

医師としてのプロフェッショナルリズム	医師としての責任感と職業倫理観に基づいて行動し、生涯にわたり向上心を持ち自己研鑽に励む自覚と能力が身についている。
コミュニケーション能力	お互いの立場を尊重し、相手から信頼される関係を築くためのコミュニケーション能力が身についている。
専門職連携	患者の健康問題の解決に向け、多職種での取り組みを実践する能力が身についている。
医学および関連領域の知識	医療の基盤となっている基礎、臨床、社会医学等の知識を有し、応用する能力が身についている。
独創的探究心	疑問点を解決するために行動する独創的な学究精神と科学的能力が身についている。
診療の実践	安全かつ科学的根拠に基づいた適切な診療を実践する能力が身についている。
地域社会への貢献	地域の保健・医療・福祉の課題を理解し、その解決のために貢献する能力が身についている。

また、最後に自由記載欄を設定し、「何でも結構ですのでコメントを御願います」と依頼した。

本学では、過去に2020・2021年度卒業生を対象に同様の調査を実施したが、当時の評価尺度は「1：全く修得できていない、2：十分に修得できていない、3：ある程度修得しているが、最低水準には届かない、4：最低水準は修得できている、5：概ね修得できている、6：完全に修得できている。」の6段階であった。評価尺度が異なるため正確な比較はできないが、直近3年度の変化の傾向を見るために、「最低水準には届いている」と評価された人数とその割合、および、「概ね、または、完全に習得できている」と評価された人数とその割合を設問毎に示した。なお、「最低水準には届いている」とは、今年度実施した4段階の評価尺度では「2：最低水準には届いている」以上の評価が得られたことと定義し、過去に実施した6段階の評価尺度では「4：最低水準は修得できている」以上の評価が得られたことと定義した。同様に、「概ね、または、完全に習得できている」とは、今年度実施した4段階の評価尺度では「3：最低水準を超え、概ね習得できている」以上の評価が得られたことと定義し、過去に実施した6段階の評価尺度では「5：概ね修得できている」以上の評価が得られたことと定義した。

4. 結果

(1) 2022年度卒業生研修先の調査結果

調査対象107人のうち83人について回答が得られた（回収率77.6%）。

表1に2022年度卒業生の各調査項目における回答の分布を示す。7つの項目のいずれにおいても、「2：最低水準には届いている」以上と評価された卒業生の割合は100%であった。「3：最低水準を超え、概

ね習得できている」以上と評価された卒業生の割合を項目別に比較すると、＜コミュニケーション能力＞と＜医師としてのプロフェッショナリズム＞の評価が顕著に高く、それぞれ、91.6%と 85.5%であった。一方で、＜地域社会への貢献＞の評価が最も低く、45.8%であった。

自由記載欄には 5 件の回答が寄せられた。卒業生の人柄や勤務に対する取り組みを評価するものが 3 件、大学への謝意が 1 件、初期研修 1 年目の段階で「独創的探究心」を持つ研修医は少ないのではという意見が 1 件であった。

(2) 2020～2022 年度卒業生研修先の調査結果の推移

過去に実施した 2021 年度・2020 年度卒業生を対象にした調査では、調査対象者（それぞれ 104・102 人）のうちそれぞれ 79 人（回収率 76.0%）と 81 人（回収率 79.4%）から回答が得られた。

表 2・3 にそれぞれ 2021・2020 年度卒業生を対象とした各調査項目における回答の分布を示す。また、図 1 に「最低水準には届いている」と評価された割合の直近 3 年間の推移を、図 2 に「概ね、または、完全に習得できている」と評価された割合の直近 3 年間の推移を示す。

今回の調査では、7 項目すべてにおいて「最低水準には届いている」と評価された割合が 100%に達した。「概ね、または、完全に習得できている」と評価された割合は、7 項目すべてにおいて大幅に増加したが、「地域社会への貢献」は 19.5 ポイントの増加に留まり、他の項目と比べて増加幅は小さかった。ただし、前節に記した通り、今回の調査と過去の調査で評価尺度が異なる。このため、必ずしも公平な比較とは言えないことに注意いただきたい。

5. まとめ

本調査結果から、本学医学部卒業生の卒業コンピテンス・コンピテンシーは少なくとも最低水準には到達できていると研修先病院から評価されていることが確認できた。特に、＜コミュニケーション能力＞と＜医師としてのプロフェッショナリズム＞の 2 項目の評価は高く、「概ね、または、完全に習得できている」と評価された割合は、それぞれ、90%と 85%を超えていた。これら 2 項目は、直近 3 年間でも一貫して高い評価を受けていた。＜診療の実践＞、＜医学および関連領域の知識＞、＜専門職連携＞、＜独創的探究心＞の 4 項目でも「概ね、または、完全に習得できている」と評価された割合は 50%を超えており、一定の評価が得られた。一方で、「地域社会への貢献」はその割合が 45.8%に留まり、教育カリキュラムを通して、いかに地域への関わりを高めていくべきかという課題が明らかになった。

6. 謝辞

ご多忙のところ本調査にご協力いただきました病院ならびに関係者の皆様に御礼申し上げます。

表 1. 各設問の回答分布：2022 年度卒業生への評価

	最低水準には 届かない	最低水準には 届いている	最低水準を超え、 概ね 習得できている	最低水準を超え、 完全に 習得できている
＜医師としての プロフェッショナリズム＞	医師としての責任感と職業倫理観に基づいて行動し、生涯にわたり 向上心を持ち自己研鑽に励む自覚と能力が身についている			
	0 (0.0%)	12 (14.5%)	62 (74.7%)	9 (10.8%)
＜コミュニケーション能力＞	お互いの立場を尊重し、相手から信頼される関係を築くための コミュニケーション能力が身についている			
	0 (0.0%)	7 (8.4%)	62 (74.7%)	14 (16.9%)
＜専門職連携＞	患者の健康問題の解決に向け、多職種での取り組みを実践する能力が 身についている			
	0 (0.0%)	31 (37.3%)	49 (59.0%)	3 (3.6%)
＜医学および 関連領域の知識＞	医療の基盤となっている基礎、臨床、社会医学等の知識を有し、 応用する能力が身についている			
	0 (0.0%)	30 (36.1%)	49 (59.0%)	4 (4.8%)
＜独創的探究心＞	疑問点を解決するために行動する独創的な学究精神と科学的能力が 身についている			
	0 (0.0%)	36 (43.4%)	43 (51.8%)	4 (4.8%)
＜診療の実践＞	安全かつ科学的根拠に基づいた適切な診療を実践する能力が 身についている			
	0 (0.0%)	28 (33.7%)	49 (59.0%)	6 (7.2%)
＜地域社会への貢献＞	地域の保健・医療・福祉の課題を理解し、その解決のために貢献する 能力が身についている			
	0 (0.0%)	45 (54.2%)	34 (41.0%)	4 (4.8%)

() : 未回答者を除く%

表2. 各設問の回答分布：2021年度卒業生への評価

	全く 修得 できて いない	十分に 修得 できて いない	ある程度 修得して いるが、 最低水準 には 届かない	最低水準は 修得 できている	概ね 修得 できている	完全に 修得 できている
＜医師としての プロフェッショナリズム＞	医師としての責任感と職業倫理観に基づいて行動し、生涯にわたり 向上心を持ち自己研鑽に励む自覚と能力が身についている					
	0 (0.0%)	3 (3.9%)	7 (9.1%)	30 (39.0%)	34 (44.2%)	3 (3.9%)
＜コミュニケーション能力＞	お互いの立場を尊重し、相手から信頼される関係を築くための コミュニケーション能力が身についている					
	0 (0.0%)	2 (2.6%)	7 (9.1%)	18 (23.4%)	45 (58.4%)	5 (6.5%)
＜専門職連携＞	患者の健康問題の解決に向け、多職種での取り組みを実践する能力が 身についている					
	1 (1.3%)	1 (1.3%)	15 (19.5%)	30 (39.0%)	26 (33.8%)	4 (5.2%)
＜医学および 関連領域の知識＞	医療の基盤となっている基礎、臨床、社会医学等の知識を有し、 応用する能力が身についている					
	1 (1.3%)	2 (2.6%)	15 (19.5%)	33 (42.9%)	24 (31.2%)	2 (2.6%)
＜独創的探究心＞	疑問点を解決するために行動する独創的な学究精神と科学的能力が 身についている					
	2 (2.6%)	1 (1.3%)	11 (14.5%)	40 (52.6%)	20 (26.3%)	2 (2.6%)
＜診療の実践＞	安全かつ科学的根拠に基づいた適切な診療を実践する能力が 身についている					
	1 (1.3%)	2 (2.6%)	13 (17.1%)	32 (42.1%)	25 (32.9%)	3 (3.9%)
＜地域社会への貢献＞	地域の保健・医療・福祉の課題を理解し、その解決のために貢献する 能力が身についている					
	2 (2.6%)	5 (6.6%)	15 (19.7%)	34 (44.7%)	18 (23.7%)	2 (2.6%)

() : 未回答者を除く%

表 3. 各設問の回答分布：2020 年度卒業生への評価

	全く 修得 できて いない	十分に 修得 できて いない	ある程度 修得して いるが、 最低水準 には 届かない	最低水準は 修得 できている	概ね 修得 できている	完全に 修得 できている
＜医師としての プロフェッショナリズム＞	医師としての責任感と職業倫理観に基づいて行動し、生涯にわたり 向上心を持ち自己研鑽に励む自覚と能力が身についている					
	0 (0.0%)	0 (0.0%)	11 (13.6%)	32 (39.5%)	32 (39.5%)	6 (7.4%)
＜コミュニケーション能力＞	お互いの立場を尊重し、相手から信頼される関係を築くための コミュニケーション能力が身についている					
	0 (0.0%)	3 (3.7%)	2 (2.5%)	28 (34.6%)	36 (44.4%)	12 (14.8%)
＜専門職連携＞	患者の健康問題の解決に向け、多職種での取り組みを実践する能力が 身についている					
	0 (0.0%)	4 (4.9%)	12 (14.8%)	39 (48.1%)	22 (27.2%)	4 (4.9%)
＜医学および 関連領域の知識＞	医療の基盤となっている基礎、臨床、社会医学等の知識を有し、 応用する能力が身についている					
	0 (0.0%)	5 (6.2%)	9 (11.1%)	34 (42.0%)	32 (39.5%)	1 (1.2%)
＜独創的探究心＞	疑問点を解決するために行動する独創的な学究精神と科学的能力が 身についている					
	0 (0.0%)	3 (3.8%)	18 (22.5%)	38 (47.5%)	20 (25.0%)	1 (1.3%)
＜診療の実践＞	安全かつ科学的根拠に基づいた適切な診療を実践する能力が 身についている					
	0 (0.0%)	4 (4.9%)	11 (13.6%)	38 (46.9%)	26 (32.1%)	2 (2.5%)
＜地域社会への貢献＞	地域の保健・医療・福祉の課題を理解し、その解決のために貢献する 能力が身についている					
	0 (0.0%)	4 (4.9%)	19 (23.5%)	39 (48.1%)	18 (22.2%)	1 (1.2%)

() : 未回答者を除く%

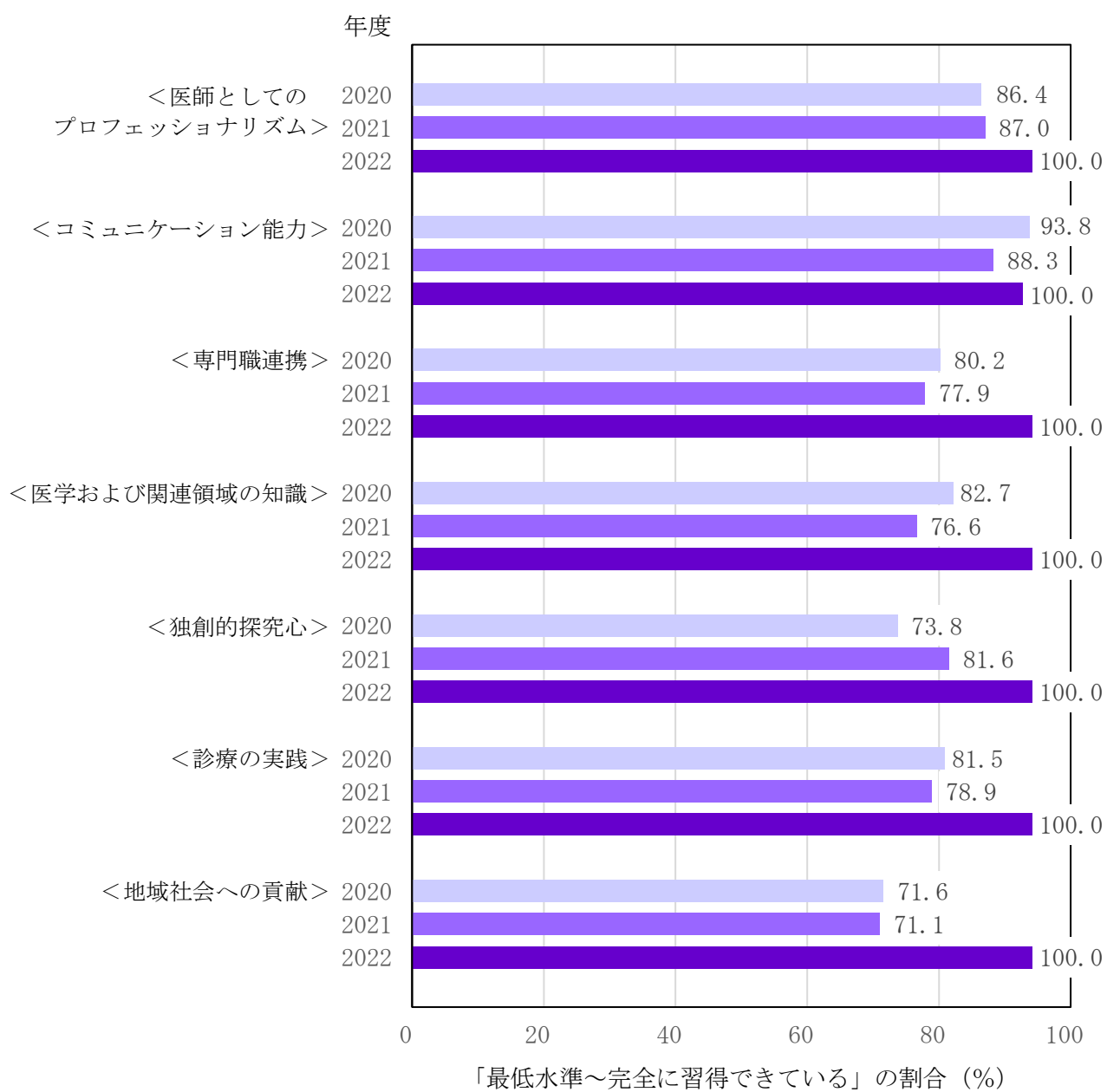


図1. 「最低水準には届いている」と評価された割合：2020～2022年度卒業生への評価

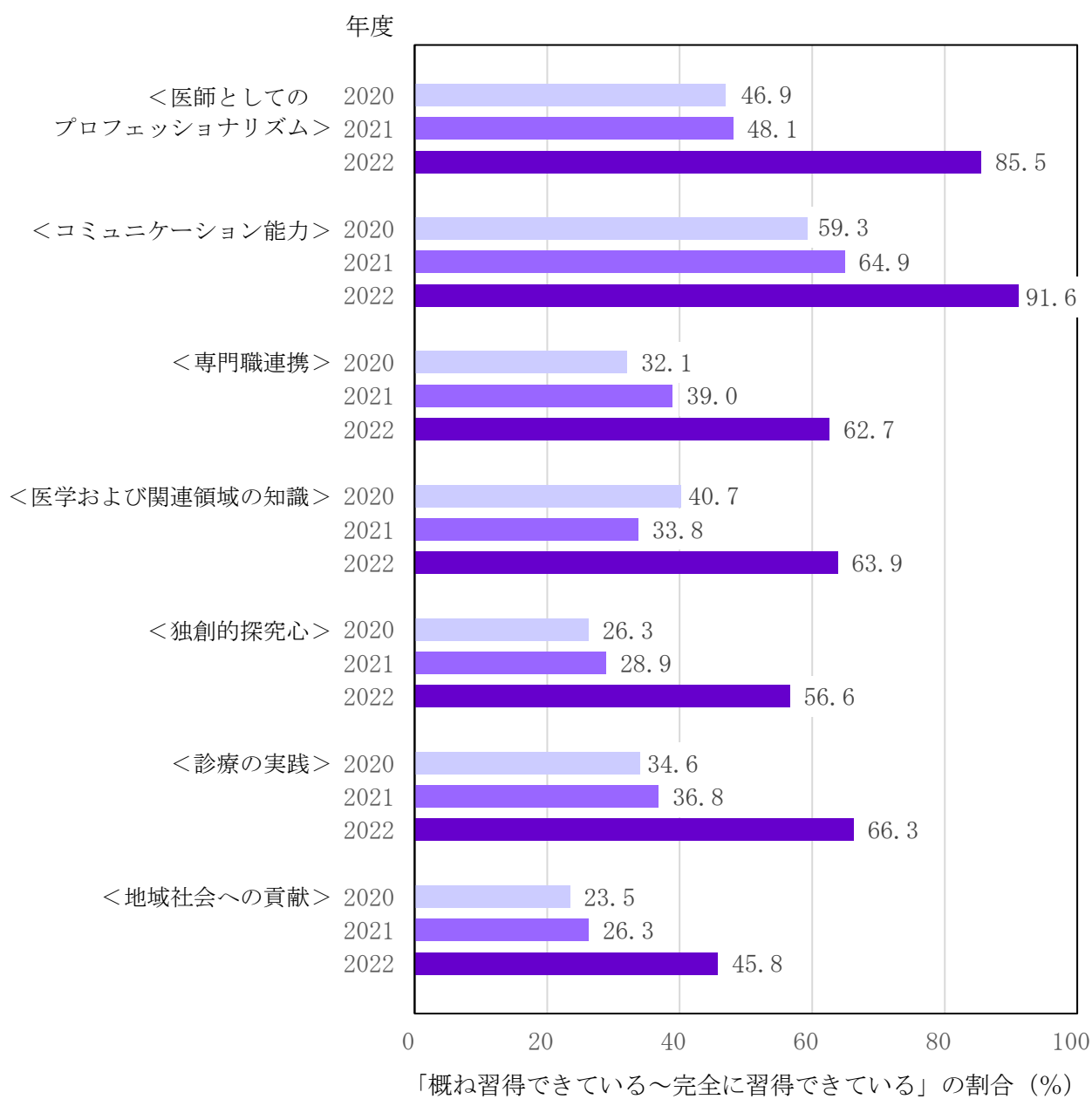


図2. 「概ね、または、完全に習得できている」と評価された割合：2020～2022年度卒業生への評価